

立命館中学校・高等学校 2017年度 学校総括

2018年 3月 31日 作成者：竹中 宏文

教育目標		中期目標						
主体的に学ぶ意欲と向上心、社会に貢献する使命感と行動力を持ち、他者を理解しリーダーシップを発揮できるリーダーを育てる		①小中高 4-4-4 制一貫教育推進のための校務運営・組織の一体化 ②小中高 4-4-4 制一貫教育における教育課題の実現 ③中高一貫教育の独自課題の追求 ④SGH・SSH 事業の充実・特色化と成果の発信 ⑤MS コースの充実と他大学進学実績の向上 ⑥上記教育課題を推進するための環境整備						
区分	A. 課題(上位目標)	B. 目標(中位目標)	C. 達成目標(当年度目標)	D. 自己評価	E. 具体的施策(どのような方法で)			
I	高い学力形成と主体的な学びを促す授業づくり	1 授業公開のさらなる日常化と「学びあい」風土の醸成	(1) 各教科や各学年での授業公開文化の醸成	◎	① 各教科での教員相互の授業公開の機会の実施 ② 各学年やさまざまな機会での公開授業の実施 ③ 執行部教員も含め、教員相互の授業見学と助言のシステム化の検討 ④ 総務・研修部による「授業力向上委員会」の継続的取組の実施 ⑤ 小中校全体の研修の機会における教科会議等、12年間一貫教育を視座にした研修機会の設定 ⑥ 各教科の学力評価指標の策定と定期テストの改善、到達目標の多様化への対応 ⑦ 特に、各教科における「テスト問題」に関してお互いに知り合い学びあう機会の設定 ⑧ 本校の教育活動の整理と集中化を検討する「教育システム将来構想委員会(仮称)」の立ち上げと新教育課程実施に向けての策定の開始			
			(2) 執行部教員をはじめとして教員相互の授業見学・相互助言の日常実施	○				
			(3) 総務・研修部による「授業力向上委員会」の継続とさらなる充実	◎				
			(4) 立命館小学校の教員とともに授業づくりや学級づくりをお互いに学ぶ機会や立命館小中高での生徒の成長を共有する機会の充実	△				
			(5) 生徒の実態に沿い、かつ確実に到達目標を達成する、指導システムの検討	○				
		2 研修の機会の創造と研修の日常化	(1) 総務・研修部による「授業力向上委員会」主催の各種研修の継続	◎		① 校内研修会の継続実施と時間確保 ② 校内の研修会の実施内容や課題内容の共有化の工夫 ③ 校外での各種研修への積極的参加の促進とその成果の共有化への方策の検討 ④ 中高連主催の各種研修会への参加率の向上 ⑤ 中高連主催の「私学教育研究大会」のスムーズな運営と積極的参加 ⑥ 教職大学院との協力、附属校教育研究・研修センターのさまざまな企画の活用		
			(2) 校外での各種研修への積極的参加の促進とその成果の共有化への方策の検討	○				
			(3) 10月の「私学教育研究大会」を軸にした、私学教育の現状理解の促進	◎				
			(4) 附属校教育研究・研修センターとの連携の充実	○				
		3 基礎学力のさらなる充実と高い学力形成	(1) 主体的な学習姿勢の形成(予習・家庭学習時間の拡充)の方策の検討	△		① 多様化する生徒の実態を考慮した各科目の到達目標の設定と、全体の引き上げ、および 目標を到達させざる指導 ② 各科目での家庭学習を促す予習や復習の指導の検討 ③ 家庭学習時間調査の実施と、その結果をうけての各教科・学年での方策の検討 ④ 家庭学習を確保する学校生活のあり方の検討を含めた、教育システムの構想への着手 ⑤ 補講の機会の充実、学生TAやICT活用によるサポート体制の充実検討 ⑥ 授業振替原則の徹底、および(やむを得ず)課題対応の場合の課題内容・指導の充実		
			(2) 特に、ファーストステージにおける基礎学力の再徹底方策の充実を受けての、さらなるセカンドステージでの学力向上方策の検討と実施	○				
			(3) 大学で活躍する、高い基礎学力の形成に向けて、プレエントランス・プレメントテストや学力推移調査結果の向上に向けた取り組みの実施	◎				
			(4) 授業振替原則の徹底と自習課題の縮減	○				
		4 生徒の主体的な学習を促す方策の積極的実施(問題解決型学習・アクティブラーニング等)	(1) 高2・高3年全校で実施の「課題研究」の充実	○		① 「課題研究科」での「課題研究」授業の定型化とさらなる高度化への方策の検討 ② 各教科でのレポート、ポスターセッション等の研究活動の充実 ③ JSSFやRSGF、RGSの継続的かつ発展的な実施と高度化と一般化の両立 ④ 特に、SSGやGLの生徒に対しての「課題研究」のさらなる高度化への方策の検討 ⑤ 英検・TOEFL・GTECの到達目標の引き上げと整理 ⑥ 英語による授業の拡充の検討と、英語で授業ができる教員を増やす研修の機会		
			(2) ICT環境の充実と積極的活用	○				
			(3) GJ・GL・SSG等でのグローバル・リーダー育成プログラムの確実な実施	○				
			(4) 英語運用能力の向上(英検・TOEFL・GTECの到達度アップ)	○				
		5 キャリア教育の充実	(1) CE・SSをはじめとした各コースの高大連携の充実	○		① アカデミックデー・キャリアガイダンスなどの充実 ② 学部スペシャリスト等と大学各学部との連携の充実 ③ 中2「Discovery Social Project(職業体験)」の確実な実施と、実施システムの確立 ④ 高1におけるCSL(Career Service Learning)の昨年度実施の総括と今年度実施の可能性の検討		
			(2) 自らの進路を主体的に考えさせる進路指導の充実	○				
			(3) 社会と結びつき、キャリアを体験・考えさせる機会の充実	○				
		6 MS等の進路結果の向上	(1) 医学部等難関大学の合格者数の確保	◎		① 中3からの4年間MS指導プログラムの確立と充実 ② 他大学・高校等の情報提供とデータ蓄積と分析		
			(2) 中学校から他高校受験や高校での中途転学生徒への円滑な進路指導	△				
		II	自立し社会に貢献する心の育成	1 生活改善と人格形成		(1) 「時を守り、場を整え、礼を尽くす」精神の再徹底	○	① 挨拶の徹底(まずは教職員から、クラブ等の自主的取組の促進) ② 通学マナーの徹底(「地域を愛し、地域から愛される学校」に) ③ 障がい者理解の取組の促進 ④ いじめ防止の自主的取組の促進 ⑤ 保護者とともに取り組む、子育てに関する研修などの機会の充実
						(2) 情緒・感性・豊かな人間性の育成	○	
2 生徒会活動・委員会活動・クラブ活動の活性化	(1) 学校・学年行事での自主性・主体性や自立心の育成			◎	① 各種、各学年の宿泊研修を通して、自立に向けたプログラムの充実 ② 学内協議会、学内懇談会、修学旅行協議会などの充実と広報策の検討 ③ クラブ政策に基づくモデルクラブ・重点強化クラブ・同好会などによる活性化促進 ④ 小学校の「立命科」と結合した「グローバルシチズンシップ育成教材」の開発			
	(2) 生徒会活動や委員会活動への積極的関わりを促す指導の検討			◎				
	(3) クラブ活性化政策の推進			○				
3 社会貢献活動の充実	(1) 地域交流・社会貢献活動の拡充			○	① 地域清掃や吹奏楽演奏などによる地域貢献活動の継続実施と拡充 ② Warm Heart、RIVIO、海外ボランティア活動などの取組みのさらなる充実 ③ 昨年度、高1で実施されたCSL(キャリア・サービス・ラーニング)の可能性の追求			
	(2) ボランティア活動の機会拡大			○				
	(3) 震災復興支援の取組みの継続と充実			◎				
	(4) 地域交流・社会貢献活動の拡充			○				
III	「4-4-4」小中高一貫教育の推進	1 RNK2020委員会の議論の継続と、12年間一貫・6年間一貫プログラムの策定	(1) セカンドステージの接続カリキュラムの充実	△	① RNK2020委員会を中心とした、新しい教育システムづくり(像)の議論とまとめ ② セカンドステージ推進室による方針提起と全校的位置づけ ③ 小中高合同によるカリキュラムの具体的協議の活性化			
			(2) サードステージの接続カリキュラムの確立	△				
			(3) 12年間一貫カリキュラムの小中高教員による具体的議論と策定	×				
		2 児童生徒の交流及び小学生の長岡京登校	(1) G5・G6児童の長岡京登校での教育内容の充実	△		① セカンドステージ推進室による長岡京登校プログラムの企画運営と全校への早期周知 ② 通学・給食・チャイムなどの学校運営上課題の整理と円滑な実施 ③ クラブ活動や諸行事における交流		
			(2) 長岡京キャンパスを活用した小学校行事の活性化	○				
			(3) 児童生徒の交流活動の拡充	△				
IV	科学教育・国際教育の推進	1 科学教育の推進	(1) 第4期SSH事業ならびに人材育成重点事業の円滑な遂行と今後の展望の検討	◎	① JSSF2017の円滑な実施と全校的位置づけ ② 理数分野における「課題研究」のさらなる充実 ③ 国際共同課題研究の拡充 ④ 科学オリンピック等への参加促進と指導体制の検討 ⑤ 国内外校との連携ならびに立命館をはじめとする大学連携の促進			
			(2) 理系人材の育成数の拡大	△				
		2 国際教育の推進	(1) SGH事業4年目の円滑な実施とさらなる充実と今後の展望の検討	◎		① RSGF2017の円滑な実施と全校的位置づけ ② AA研修等の海外プログラムやRGS2018の確実な実施 ③ 中学校における海外プログラムの充実の検討 ④ GLのプログラムの実施継承と、TAなどの支援の継続 ⑤ GJからのプログラムの検討と継続的実施 ⑥ ホームステイ受入の拡大に向けた家庭支援の充実 ⑦ ギャップタムプログラム(UBC・DCU)への参加者数の拡大		
			(2) 海外プログラムのさらなる充実と整理、および全校への周知	◎				
			(3) GL・GJのプログラムの充実	○				
			(4) CE・SSの生徒も含むプログラムの開発	○				
			(5) 上記に伴う、経済的支援策の検討	×				
			(6) 留学生の派遣数並びに受入数の拡充	◎				
		3 科学・国際教育推進体制の充実	(1) 国際センターによる国際プログラムの統括	○		① 国際センターへの人員配置の検討と事務体制の検討 ② 国際センターによる、GJ・GL・SSG等のプログラムの企画調整		
			(2) SSH事業の全校的位置づけ化	○				
			(3) SGH事業の全校的位置づけ化	○				
			(4) 国際センターによる国際プログラムの統括	○				
I	「4-4-4」小中高一貫教育	1 小中高一体運営	(1) 一体運営のための諸組織の再編と、権限・責任の明確化	△	① R-12部長会議ならびにR-12企画運営会議の定期的開催 ② 両キャンパスの教員による「全体教員会議」ならびに「全体研修会」の実施 ③ 両キャンパスでの、執行部会・運営委員会・教員会議の円滑な実施			
			(2) 「4-4-4」システムの円滑な実施	△				

管理運営課題	システム構築		(3)	「4-4-4」システム実施に伴う諸課題の整理と解決	△	④ RNK2020委員会を中心としたさらなる議論の整理とまとめの実施 ⑤ 校務分掌組織の再編に向けて、集中的議論と方針の確定
			(4)	校務分掌組織の再編	△	
	II 教員体制の充実と教育力の向上	1 研修・研究の充実	(1)	小中校での12年間一貫教育を視座においた教員体制の構築	○	① 小中校一貫教育をさらに前進させる、教員定数政策も含めた、運用政策の検討 ② 総務・研修部による「授業力向上委員会」の継続とさらなる充実 ③ 「授業力向上委員会」を中心に、授業の「ルーブリック」評価の検討 ④ 本校の教育活動の整理と集中化を検討する「教育システム将来構想委員会(仮称)」の立ち上げと新教育課程実施に向けての策定の開始 ⑤ 会議におけるペーパーレス化のさらなる推進 ⑥ ICT活用によりシステム導入の検討 ⑦ 教職大学院で学ぶ研修員の成果の向上
			(2)	小中合同研究会を軸にした校内研修の充実	○	
			(3)	教職大学院や附属校教育研究・研修センターとの連携による諸研修の充実	○	
			(4)	授業公開・授業研究会の活性化	◎	
			(5)	授業評価を活用した授業力の向上	△	
			(6)	教員のICT活用と業務のスマート化	○	
	2 生徒の学習支援・いじめ防止	(1)	心のケア・学習支援の体制充実	◎	① 保健部を軸とした学習支援ケース会議の継続的な適宜開催 ② 特別支援教育コーディネーターの育成・配置の検討 ③ いじめ防止対策委員会の適宜開催 ④ 教育相談支援センター構想の早期実現に向けた調整	
		(2)	いじめ防止などの生徒状況の早期把握	◎		
		(3)	特別支援教育の理解促進	○		
		(4)	「教育相談支援センター」構想の早期実現と活用	◎		
	III 地域・社会連携ネットワークの拡大	1 家庭・PTAとの連携	(1)	保護者への伝達と周知の徹底	○	① 配布物の手順の整理、WebやSNSの活用(一定のルール化) ② PTA活動との連携 ③ 保護者アンケートの結果を活かした教育展開の工夫 ④ 保護者向け研修の拡充
			(2)	子どもを取り巻く社会状況変化の共有化と緊密な連携による生徒指導	◎	
			(3)	小学校保護者会と中高PTAとの連携促進	◎	
		2 立命館清和会・教育後援会・卒業生父母の会との連携	(1)	卒業生ネットワークの重視と拡充	◎	① 立命館清和会行事への積極的参加や各種寄付への協力 ② キャリアアドバイザーや学部紹介などへの人的支援の依頼 ③ クラブOB・OG会などのネットワーク化
			(2)	教育活動への協力支援の拡充	○	
			(3)	周年記念事業への寄付等の支援	△	
3 地域との連携		(1)	長岡京市をはじめとした乙訓地域との教育・文化交流の促進	◎	① 地域教員研修等の実施、各種地域への開放行事の継続実施 ② 長岡京市や近隣地域の文化芸術活動への施設開放および参加 ③ 地域防災体制への貢献 ④ エコキャンパスとしての環境教育活動の検討	
		(2)	地域防災体制の確立	○		

達成状況	<p>2017年度は、立命館小学校・中学校・高等学校の12年間一貫教育(R-12)体制での一体運営を始める年としていた。そのため、2017年度からは、12年間の統括責任者である代表校長を置き、その上で、ファースト・セカンド・サードのそれぞれのステージの責任者である各学校長を置くシステムをとることとした。が、当面は、ファースト・セカンド・サードの各ステージの学校長は、小学校・中学校・高等学校のそれぞれの責任者として各学校長を兼ねることとしていた。この体制は、ひとつは現実的には北小路と長岡京でキャンパスがかなり離れていること、もうひとつは、やはり、旧来の6-3-3制の教育の流れを断ち切るのは難しいこと、さらには2016年度末の急な人事的体制変更もあり、2017年度の現実としては、北小路と長岡京では別のキャンパスとしての動きのこの方が多く、その限界性が強く感じられる1年となった。</p> <p>また、2017年度の長岡京キャンパスにおいては、中学校におけるコース制の課題、特に、セカンドステージ後半における立命館小学校からの一貫コース生徒の実態と指導の困難性がクローズアップされ、立命館小学校出身の生徒の活躍の一方で、個々の生徒にはよるが、彼らの課題とそれにつながる小学校での指導の課題がより明確に見えてきた。</p> <p>国際化の推進</p> <p>SSHは、JSSF2017に24カ国・地域から海外校33校、国内校16校の参加を得て、盛大かつ成功裏に終えることができた(昨年度は海外22カ国・地域から33校、国内校14校の参加)。これだけ多様な国・地域の海外校と交流のある学校は全国的にも希で、国際色豊かにサイエンスを学ぶ「夢のような1週間」を今年も創りあげ、また、今年度はSSGクラスの生徒を中心に海外校との共同課題研究に取り組む事例が増えた。シンガポールNJC、韓国KSA、台湾KSHS・KGHSの生徒たちとともに、共同のテーマに英語を介してアプローチする経験は、一般の高校では経験しがたいもので、今後、さらに発展させていきたいと考えている。また、SSHの3年目の「中間評価」においては、最高位の評価を得ることができ、本校の実践への期待がますます高まっていることを感じた。SGHの取り組みの中心であるRSGFには、海外10カ国11校の参加を迎え、本年度は国内校の2校の参加も受け、過去最大規模での実施となった。本年のテーマは、“Education for Children”で活発かつ深い議論が繰り広げられた。文部科学省主催の「2017年度スーパー・グローバル・ハイスクール全国高校生フォーラム」においては、実質全国2位の審査委員長賞を受賞した。このフォーラムにおけるコンテストでは、ポスターセッション方式で、代表生徒が本校のSGHの取り組みを英語で発表し、質疑応答に答えるなかで、その取り組み自体や成果だけでなく、生徒が取り組みに主体的に関わり、審査員からの厳しい質疑にも的確に答えることができたことで、評価を受けた。</p> <p>2017年度の立命館中高全体の海外への研修派遣人数は、3月末までで昨年より151名多い計877名にのぼった。短期プログラムに関しては、SSHやSGHでのカナダ、アメリカ、イギリス、タイ、シンガポール、韓国、オーストラリア等の姉妹校・協定校への研修や共同研究事業を中心に、今年度も多様な海外研修プログラムを実施した。高校時代に、隣国やアジアの他国の同年代の学生と実際触れ合うことにより、生徒たちは刺激を受け、意欲的に英語を勉強したり、積極的に行動したりするなど影響を受けた生徒も多くみられた。特に、本年度からは、スペインの協定校へのクラブ活動単位での交流を開始し、本年度は高校サッカー部34名が参加した。参加生徒の中には、この体験が将来の進路にも好影響を及ぼしたという者も多数おり、国際化を広げる取り組みとなった。</p> <p>MSコースの生徒を中心とした他大学進学について、2018年度入試においては、東京大1名、京都大6名、大阪大・九州大・神戸大 各3名、名古屋大1名など、国公立大学が計38名となった。私立大学も、慶応義塾大学や早稲田大学を中心に、多くの合格者を出した。また、特に、医学部医学科に関しては、京都府立医大や滋賀県立医大などに計19名が、獣医学部には1名(現役)、歯学部には3名(現役：MS)、薬学部には計25名(うち24名が現役)が合格した。さらに、海外大学への進学も、カナダのUBCを含めて、2名が海外大学への進学となった。</p>
	<p>上記に述べたR-12の課題については、そのこと自体は、従来の立命館小学校と立命館中高の関係を乗り越え、より一体として、自覚的に動きをつくれる環境が整ったことの現れではあるのだが、反対に、従来理想としてきた教育像を補正し、より生徒の実態に即した体系を構築していかなければならないという課題に挑戦していくことを余儀なく求められるということであり、立命館が大切にしてきた教育像・学校像を再整理しながら、このことを進めるスタートを、2017年度は、きつたと考えている。今後、R-12部長会議を軸に、その議論をさらに進め、深めていきたい。</p>
	<p>現在議論を進めている長岡京キャンパスにおける新しい教育システムのあり方検討を実現していくためには、いくつかの環境整備も重要であり、2018年度以降、提起していくこととなる。</p> <p>また、2017年度末に、文部科学省から、2015年度から2020年度の本校のスーパーサイエンスハイスクール事業指定のうちの前半の3年間(2015-2017)指定されていた「科学技術人材育成重点校」について、残り2年の期間についても申請していたが、残念ながら、採択されなかったため、特に、2018年度については善後策が必要である。毎年実施してきたJapan Super Science Fair(JSSF)は、本学園にとっても財産ではないかと考えるので、よりよい実施形態を、全学をあげて探っていただきたい。</p>